

## シンポジウム

## 遺伝子操作の基礎と臨床

東京女子医科大学学会第272回例会

## 序 言

第一生理学教室 橋本 葉子

日時 昭和62年11月12日(木)

会場 東京女子医科大学 臨床講堂 I

司会 橋本 葉子教授(第1生理)

神田 尚俊講師(第2解剖)

1. 遺伝子増幅と染色体異常  
神田 尚俊(第2解剖)
2. ヒト心筋ミオシン重鎖(MHC)遺伝子の構造と染色体上の位置決定  
松岡瑠美子(循環器小児科)
3. ヒト癌細胞における癌遺伝子および染色体の異常 和田真紀夫(第1内科)
4. ヒト肝癌より見出された癌遺伝子について  
長原 光(消化器内科)
5. 遺伝子操作により作製されたホルモンの臨床応用  
一特に成長ホルモン(GH)について—  
肥塚 直美(第2内科)
6. 遺伝子操作合成ヒトインスリンによる糖尿病の治療 田坂 仁正(第3内科)

第272回東京女子医科大学学会例会は『遺伝子操作の基礎と臨床』というシンポジウムを行なった。例会でシンポジウム形式を採用したのは初めての試みとのことである。

人間の遺伝子は30,000~50,000コ存在すると予想されているが、約2,000コのDNA塩基配列は確定し、染色体上の位置も判明しているものが多い。1990年代には10,000コの遺伝子の塩基配列が決定されると予想されている。そのため、世界各国が共同してローラー作戦を展開し、できるだけ早くカタログを作り、それをデータベースとして、遺伝子の動態を調べるアプローチ、遺伝子の発現を調べるアプローチ、薬作りへのアプローチ等に應用しようとしている。

網膜においてもこの手法を應用して視物質の一次構造が決定され、どの染色体に含まれているかも決定された。この視物質の構造骨格が $\beta$ アドレナリン受容体やムスカリン性アセチルコリン受容体とも似ていることが明らかになり、これは受容体の基本構造なのではないかと考えられている。臨床では想像以上に速いスピードで診断や治療に應用され始めている。

本学においても遅ればせながら、P2レベルの研究ができるような設備を総合研究所に整備することになり、着々と準備も整い、来年度から使用できる運びになった。この時期に遺伝子操作の基礎的研究、各分野の現状、遺伝子工学によって作られた薬物の臨床応用等について、若手のシンポジストにホットな話題を提供して頂き、活発な討論がなされたことは、本学の遺伝子研究の発展に大いに寄与し得たものと確信している。時間の都合上シンポジストに十分な時間の配分ができなかったことは残念であった。

〔Symposium〕

Basic research and clinical application of gene engineering